
もしも、Fateのサーヴァントがクロスオーバーしたら

Rekusyo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もしも、Fateのサーヴァントがクロスオーバーしたら

【Nコード】

N5393P

【作者名】

Rekusyo

【あらすじ】

Fateのサーヴァントがもしあのアニメキャラだったら。そんな想像のもと、ほぼ全てのサーヴァントが違うキャラになり、士郎や凜といった原作マスターたちと聖杯戦争を繰り広げます。救済をもとめる者。第二の人生を生きる者。闘争を求めた者。世界を救いたい者。弟を思う者。救い、育てる者。これはその一コマを抜きだした短編です。

（前書き）

どもども、Rレクシヨe k u s y o といいます。本文のほうは、サーヴァントが誰なのか考えながら読んでみると、面白いかもしれません。

あと、よろしければご意見・感想のほうお待ちしています。それでは、早速本文のほうをどうぞ！

『聖杯戦争。参加する魔術師は七人。彼らはマスターと呼ばれ、七つのクラスに分かれた使い魔。サーヴァントを使役する。・・・これは、たった一つきりの聖杯を奪い合う。殺し合いだ』

side アーチャー×ランサー

「・・・貴様、いったい何のサーヴァントだ。」

「ハッハッハ。なぐに、ランサーのサーヴァントですよ。俺は」

「ふざけるな！！ 槍をもたないランサーがどこにいる！！」

目の前にいるのは、自分と同等に長身の男。赤橙色の髪に中心の前髪をピンツと紫のサングラスの上にかけた特徴的なヘアースタイル。服は白と青を基調としたロングコートを着ている。

「んゝゝゝ、それは言わないでいただけませんかア。ただでさえ、マスターも半信半疑なんですからねエ」

「くっ、まあいい。どうするんだマスター？」

「・・・そうね。私にも槍をもたないランサーなんて信じられないし・・・アーチャー」

私は手に使いなれた陰陽一对の夫婦剣、干涉・莫邪を投影し凜の前に立ち、目の前の男を見据えた。

「おやおや〜？闘う気ですか」

「無論だ。聖杯戦争とはそういうものだろう？」

「ああ〜マスターから言われたのは情報収集でしたが・・・いまさら、そんなことはどうだっていいッ！」

「なに？」

「俺は、こう思っているんです。この聖杯戦争において一番重要な要素とは何か！？それは速さであると！サーヴァントを召喚するのが遅ければそれだけスタートが遅くなる。ダラダラ陣地に引きこもっているのは他の連中に出し抜かれてしまう。拳句の果てには速さがなければ戦闘に勝つことすらできない。物事を速く成し遂げれば、そのぶん時間が有効に使えます。そうッ！なら、相手が準備を整える前に、倒してしまえばいいのではないかと！下手な小細工など速さの前には路肩の石も同然！情報収集？そんなことはマスターにだってできる。俺のすべきことは史上最速のスピードでこの聖杯戦争を勝ち抜くことだオ〜〜〜！！」

あまりの早口言葉に絶句しかけた私と凜だったが、要するに奴も闘うつもりなのだろう。

男の体の表面が虹色に輝き、甲高い音を立て、周りの地面が数か所陥没した。攻撃かと構えたが、陥没した地面が細かい虹色の粒子となって男の足へと集まっていく。あれはいつたいなんだ。魔術なのか？

次第に男の足に現れていくのは、まるで機械の足。銀と紫色のそれは速さを追求しつつ、外見美を損なっていない。おそらくあれが奴の武器。

「それが貴様の宝具か」

「さて、そいつはどうか・・・」

互いに沈黙の後。これから始まるのは人知を超えたサーヴァント同士の闘い。

「受けるよ、俺の速さをオ！！衝撃のファーストブリッドオーー！！！！」

嗚呼今、冬木市を舞台に、理想に敗れた男と最速の男が激突する。

side セイバー

「一つ聞きます。あなたが私のマスターでしょうか？」

衛宮士郎は目の前に現れた女性にしばらくの間呆然としていた。いや、突然女性が現れたことにも驚いたが、その容姿にもだ。

腰にはウエスタンベルト。ジーンズの片方が太腿の所まで切断され露出し、Tシャツの片方の裾も根元まで切断した左右非対称の服は扇情的だった。そして、長く淡い紫の黒髪をポニーテールで括り月光に照らされた姿は、とても神秘的だった。

「む、怪我をしているのではないですか。」

「えっ、ああ。大したことはないよ」

すると、目の前の女性がしゃがむようにして顔を近づけてきた。士郎は尻もちをついた体勢だったので、その女性のＴシャツに隠しきれない胸元を故意せずして見てしまい。顔が赤くなってしまう。

「・・・痣になっていますね。なるほど、外にいる人物がしたのですか」

再びスツと立ち上がり、蔵の外に目を向ける。そこには先ほどまで士郎を追いかけていた紫サングラスの男がいた。

「マスターはここにいてください」

そういい残し、駆け出して行った。紫サングラスの男は追撃をするわけでもなく、口元に笑みを浮かべ、セイバーが来るのを待っている。

「んんん？少年を追いかけていたら、こんなビューーティフルな女性と出会えるとは、しかし、残念！俺はこう思っているんです、人々の出会いは先手必勝だと。どんな魅力的な女性でも、マスターとすでに出会ってしまった俺には遅すぎ」

「何を言いたいのかは知りませんが、あなたもサーヴァントですね」

セイバーの手に日本刀が現れた。それは2m以上もある大きな長刀。

「はあゝ見事な剣ですねエ、よろしければ、名前をお聞きしても？」

「セイバーのサーヴァントですが・・・あなたにはこちらの名も名乗りましょうか」

刀を構え、一気に闘志を解放する。それにあてられたのか、男も飄々とした態度をすぐに改めた。

「魔法名はSalvare000。救われぬ者に救いの手を」

魔術と魔術が交差するとき、物語は始まる。

side バーサーカー

「フフフツ。こんばんわお兄ちゃん。会うのは二度目だね。始めましてリン、私はイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンって言えばわかるでしょう？」

「アインツベルン・・・」

「フフツ、挨拶だけでいいよね。どうせここで死んじゃうんだし」

無邪気に語るその様子に士郎は寒気が走った。セイバーが七天七刀に入れる力を強め、今にも斬りかかりそうな姿勢に移る。だが

（っ、なんですか。あの後ろにいる者は）

イリヤの後ろにいるのは、士郎ほどの身長をした人物。おそらく

イリヤのサーヴァントと思われるが、その様子は尋常ではなかった。

全身から黒い靄のようなものが立ち上っており、そのため、かろうじて人型と分かるほどである。男か女かさえ分からない。

黒い靄から見えるのはギラギラとした青眼であった。視線は狂気に染まっており、士郎、凜、セイバーにプレッシャーを与えていた。

「じゃあ、殺すね。やっちゃえ！バーサーカー！」

「殺　　。殺　　。　　オ　　！！」

イリヤの冷酷な命令のもと、バーサーカーは咆哮とともにセイバーめがけて突っ込んできた。

「っ！？」

「　　！！　　オ　　！！」

バーサーカーの拳を避けるセイバー。コンクリートの道路は砕け、亀裂が広がる程度では済まず、道路が爆発した。咄嗟に士郎と凜は地面に伏せたため何とか無事のようなだ。セイバーは電柱の上に立ち、粉塵の中の様子をうかがう。

相手がどんな攻撃手段で来るのかが分からなかったため、避ける選択をしたがどうやら正解だったようだ。

（格闘でしょうか。・・・ランサーの例があるので断定はできませんが、恐ろしいのはパワーですね）

道路をあそこまで破壊するとは、まともに打ち合うのは危険だった。

「・・・殺　　オ　　！！」

再び雄たけびを上げ、粉塵の中からセイバーのいる電柱すら飛び越え、黒い狂戦士が現れる。

勝利に飢えた狂戦士と聖人との闘い。果たして勝つのはどっちだ。

side　ライダー

校舎の中から聞こえた悲鳴。一階に降りてみると女生徒が廊下に倒れていた。遠坂の話によると、魔力、生命力を奪われ危険な状態らしいということだ。

遠坂が宝石を取り出し魔術を行使する。その様子を見ていた土郎だったが

「っ！遠坂！？」

「えっ？」

廊下の窓ガラスがぽっかり一つだけ開いていた。

そこから、人が、刃物を持った人物が、外から飛び込むようにして躍り出た。着地した低姿勢のまま、一気に遠坂へと駆けてゆく。

銀色にきらめく刃物を右手で突き出し、左手でその柄を持つようにして。

「ぐっ。ああアア!!」

「衛宮君!？」

「・・・」

咄嗟に士郎は体が動いた。治療をしていた遠坂の前へと、自分の体が傷つくことなど構わず、体をだした。守らなければならない。と、反射的な行動だった。

凶刃が士郎の体に突き刺さる。その左腕へと。

「くそっ!」

「・・・」

無事な右腕を振り抜き、目の前の人物を引き剥がすが、どうやら相手から離れたようだ。驚異的な身体能力で士郎を、後ろにいた遠坂を飛び越しそのまま扉から外へと逃げてしまった。

「遠坂はその子を頼む!」

「ちょっと待ちなさい!衛宮君!？」

怪我をした左腕を庇いながら、林へと逃げてゆく青い衣の人物を追う。まるで誘われるように。

・・・林の中は不気味なほど静かだった。鳥のさえずりさえ聞かない。

「どこにいる？」

夕焼けが木々を照らす、辺りは一色で染められていた。

すると不意に、どこから声が聞こえた。いや、声というよりは

「歌？」

こんな林の中でいったい誰が、まさかさっきの人物が？歌声に導かれるように、彼は林の中を進んでいく。

しばらくして、開けた場所に着く。ススキの群生地だろうか、金色の野が風に揺らめき、そこにいたのは青い衣の人。

先ほど襲った時のままの恰好だった。青色のトンがり帽子を被り、目にはゴーグル、口元は変わった形のマスクを付けている。全身を肌の露出がまったくない青色の服を着ていた。

「あなたは、ついて来てしまったの？・・・ごめんなさい」

士郎は答えない。

「ここは私の秘密の場所です。ここなら・・・マスターにも縛られず、ありのままにいられる気がしたんです。」

士郎は言葉に出来なかった。

この場所に着いた時から、彼の視線は『それ』に釘付けだったのだ。青い衣の人の隣にいる『それ』に。

「あなたにはこの蟲がなんだかわかりますか？」

『それ』は大きな芋虫のような形だった。高さは2m程だろうか。青色の目が2、3、4・・・一つではなく数多くあり、昆虫の足を思わせるものが無数にあった。今まで見たことのない生物だった。畏怖の感情が士郎の口から深く意図せずこぼれてしまう。

「な、なんだ。その化け物」

言った瞬間、目の前の青い衣をまとった人物の雰囲気が変わった。それは、まるで様々な感情を押しとどめているようだったが、次の瞬間。

「・・・そう。あなたもそんな風に蟲達を見てしまうの」

凜とした声に殺意が混じっていた。

「腐海の蟲は魔力を食べて成長できます。つまり・・・嫌！！違う！！！」

目の前の人物が顔に両手をあてて何かを抑えようとしている。突然の様子の変化に士郎は困惑していた。すると、隣にいた蟲からいくつかが黄色い触手が伸び、青い衣の人に触れた。

蟲は何かを感じとっているかのようにだった。しばらくしてから、触手を引いてゆく。蟲の目の部分の動きは読み取れないが、士郎にはその蟲が自分を見ている気がして危機感を募らせる。

「やめて・・・王蟲^{オウム}」

王の蟲の目が赤色に変わった。

side アサシン

柳桐寺へと続く山道をセイバーは駆けていく。マスターである士郎からは行くなと言われたが、

「救われぬものに救いの手を・・・」

なかば、強迫概念に突き動かされるようにしてセイバーはゆく。民間人に危害がでるのを彼女は結局放っておくことができなかったのだ。

山道の入り口につき、石段を飛ぶように駆け昇っていく。キャスターのいる柳桐寺まではここを登るしかなく。七天七刀を抜き戦闘に備える。山の中腹にさし当ったまさにそのとき。

ピンッ

澄んだ音とともに、正面、左右から何かが飛んできた。

「なにっ!?!」

不意を突かれたセイバーだったが、なんとか、自分に当たる軌道の飛翔物をたたき落とす。セイバーがかかったのはトラップ。ワイヤーと連動して、クナイが飛んで来るというものだったが。

この罠の本当の狙いはそこではなかった。

ゾクツと、背後に違和感を感じた。振り向く間もなく、セイバーは前に転がる。

「ほう・・・いい反応だ」

「クツ！」

後ろにはいつのまにか男が立っていた。先ほど飛んできたものと同じクナイを持ってセイバーを刺そうとしたのだ。一手目のトラップは意識を全面に向ける罠。二手目で後方から刺すのが本当の狙い。なんとか逃れたものの、セイバーはかわしきれず左肩を負傷してしまった。

「アサシンです、か」

「・・・そうだ」

寡黙な美青年だった。長い黒髪を後ろでまとめ、鉄でできたプレートを付けた額当てをしており、全身を赤い雲であしらった黒服で包んでいた。だが、その中でも一番引きつけられたのはアサシンの両目だった。

瞳に車輪のように勾玉文様が浮かび、赤く光って見える目が、アサシンの目にはあった。

「（魔眼？）ここにはキャスターがいると思っていたのですが」

「オレの役目は門番と・・・敵サーヴァントの無力化」

「殺す気はないということですか？」

「あの女がな・・・甘いとは思うが・・・」

どうゆうことなのか。一般人を犠牲にしているキャスターのマス
ターがアサシンにはまるで正反対のことを命じている？

「どちらにせよ。ここは通してもらいます」

「・・・させん」

セイバーは一機に間合いを詰め、七天七刀をアサシンめがけて振りぬく。左肩を怪我をしている状態では長時間の戦闘はできない。一気に決めるしかない、と考えていた。相手がアサシンのサーヴァントであることもそれに拍車をかけただろう。

「無駄だ・・・」

「なっ!？」

しかし、アサシンの行動はセイバーの全くの予想外だった。避けるわけでもなく、防ぐわけでもなく、ただ、斬られた。そう、何の抵抗もしないままアサシンはセイバーに斬られてしまったのだ。

この時点で、すでにアサシンがなんの策も無しにセイバーの前に

立っていたのではないことに気づくべきだったのだろう。斬られたアサシンが黒い鳥の群れとなって周りを飛び回る。

「これは、まさか!？」

「お前はすでに、幻術の中だ・・・」

アサシンの目に写るは万華鏡。

side キャスター

アサシンと闘い、突然倒れたセイバーを背に担いだ士郎は家へと戻った。凜が様子を見てくれているが、不安な気持ちは抑えきれなかった。柳桐寺につくまでは勝手に飛び出したセイバーに対して、言いたいことは山ほどあったが、今はただ眠っている彼女が心配だった。

凜にはセイバーの体を診るので少し待つようにとも言われたが、自分にできることがないとはいえ、落ち着いていられるわけもなく、少し庭に出て夜風に当たっていた。

月が真上にあり、その光のためかぼんやりとした夜空がそこにはあった。

「ハア」

ため息がこぼれる。聖杯戦争に参加している自分。闘い、倒れた自分のサーヴァント。なんともいえない歯がゆさが士郎の胸の中にはあった。

「どうすればいいんだ・・・」

「どうしたの？」

「セイバーを傷つけずに済むにはどうすれば・・・えっ？」

ふと、声が聞こえた。自分のものとは違う声だ。遠坂のものでもなかった。庭には誰もおらず視線を上には夜空のほうへと向けると

「こんばんは」

「あつ、こんばんは」

女性が空に浮かんでいた・・・

「いや！誰だ、お前！？」

「そんなに警戒しなくてもいいのに。とりあえず下りるね？」

スウ　とゆっくりその女性は庭に下りてきた。栗色のツインテール。全身を包んでいるのは白と青の、なんというかテレビで見た魔法少女みたいな服装。そして極めつけは右手に持っている金属の杖。

遠坂が言っただけで、魔術は秘匿されるものなんじゃないのか？
ここまでわかりやすいと。

「魔術師！？」

「うーん、まあそれでいいかな。ほんとに魔導師なんだけど」

「いったい何のようだ！まさかセイバーを」

「だから、そんなに警戒しないで。私はただ・・・」

一瞬光ったかと思うと、目の前の魔術師はその姿を変えていた。髪はサイドポニーに、服の色調は似ているが上はスーツ、下はミニスカートになり。先ほどあった杖は消え、代わりに赤い宝石のついたネックレスがその首にかかっていた。

「あなたとお話したいんだ。衛宮士郎くん」

もしも、Fateのサーヴァントがクロスオーバーしたら。始まります。

（後書き）

いかがだったでしょうか？ではでは、残りはサーヴァントの紹介です。

クラス：セイバー 真名：神裂火織

『とある魔術の禁書目録』より、聖人のねーちんです。セイバーとしての実力も申し分なく（堕天使エロメイド的な意味でも）。彼女の苦悩と士郎の理想。似ているようで違う彼らの関わりあいを書けたらいいな、と思ったり。

クラス：アーチャー 真名：エミヤ

原作『Fate/stay night』より、そのままのクラスで参戦。ほかにいろいろと候補（管理局の白い魔王とか）があったけれど、やはり、物語の重要人物なので外せません（ランサーとの会話が書き易かったなんて口が裂けても言・・・）

クラス：ランサー 真名：ストレイト・クーガー

『スクライド』より、世界最速の男。ランサーになったのは兄貴つながりと、最速のサーヴァントであるから。シリアスモード漂うこの小説の中で、己の道をひた走る。そして彼は再び文化の真髄にたどりつく。

クラス：ライダー 真名：ナウシカ

『風の谷のナウシカ』より、まず初めに・・・ナウシカファンの方々すいませんでした！！こんなのナウシカじゃないと思うかもしれませんが、本文から多少分かるように令呪で縛られています。悪いのはあのワカメです。

クラス：キャスター 真名：高町なのは

『魔法少女リリカルなのはStrikerS』より、陣地作成？
道具作成？キャスターのクラススキルを無視し、真つ向からの全力
全壊をモットーに戦います。ただし、この聖杯戦争がどこかおかし
いことに気づいている。数少ない人物の一人。

クラス：バーサーカー 真名：

正体不明のサーヴァント。あの描写から分かる人なかなかいない
のでは？原作バーサーカー以上の強さと絶望を士郎たちに与えるこ
とでしょう。実力は全サーヴァント中まず間違いなく最強。

クラス：アサシン 真名：うちはイタチ

『NARUTO』より、若干チート気味な能力もちの兄貴第2号。
万華鏡写輪眼相手にいたいどれほどのサーヴァントがともに戦
えるのだろうか？余談だが、士郎の声を聞いた時の反応が気になる
ものである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5393p/>

もしも、Fateのサーヴァントがクロスオーバーしたら

2010年12月25日18時12分発行